

人文学会報

86号
2023. 3. 17

事務局
〒890-0005 鹿児島市下伊敷一丁目52番1号
鹿児島県立短期大学 文学科 日本文学資料室
鹿児島県立短期大学 人文学会
電話(〇九九)三〇一―二二一

〈研究室だより〉

今号は、今年度で退職される土持かおり先生と、今年度より文学科の新メンバーとしてお迎えした小亀拓也先生にご寄稿いただきました。

サヨナラ、ケンタン

土持 かおり

二〇二三年三月三十一日付で本学を退職することになりました。担当している教職科目の関係で、退職は一年ほど前までに申し出ておく必要があったため、いつ退職を申し出るか随分悩みました。続けたいという気持ちもある一方、仕事・人間関係で色々思い悩む事が続き思い

切って決断した次第です。

本学に助手で採用され、その後、助教に昇格し、教養科目・専門科目・教職科目と三つに渡り授業・研究をしてきました。大学学部ではユダヤ系アメリカ作家を

研究していましたが、仕事で英語教育にシフトチェンジし、三十代半ば頃、英語教育学(TEESOL)について専門的に知識(理論・実践)を深めるため、一大決心しイギリスの大学院修士課程へ海外研修で出させていただきました。この時の経験が後々、海外へ留学したいという学生の相談やサポートにも役立てることができたと思っています。十九、二十歳で海外へ飛び立つ本学の学生を何人も見送ってきましたが、よく決心したと、その度胸に驚かされることも度々でした。私の場合三十六歳での遅まきの留学でした。なか

なか勇気が出なかったということもありますが、アメリカに行ったことはあっても、イギリスは未経験、しかも一年間で学位取得できるかという不安のせいもありました。

大学での授業は小・中・高のように学習指導要領は検定教科書に縛られることなく、自分の使いたい教材・内容で授業ができることが魅力でした。講義科目を除き授業は全てLL教室で行い、PCの学習ソフトや様々なメディア教材を使いながら学生が楽しみながら自律的に学べる内容を心がけていました。しかし、教職の教科の指導法の講義科目である「英語科教育法」については想定外のことがありました。文科省による教職再課程認定があり、中・高等学校教員養成課程の外国語(英語)コアカリキュラムが提示され、

科教育法の授業に文科省が示す二十三個もの学習項目を入れることが必須となったのです。大学の授業でここまで細かく含めるべき内容が指定されているのは、この科目だけと言えるでしょう。さらに問題なのは、文科省はあくまでも四年生大学を念頭においているので、その半分以上が修学期間がない短大にとっては大変だということです。二十三項目以外にも授業で扱いつける必要があると私が感じている事項もあるため、後期科目を前・後期科目にして一コマ増やしたところでカバーしきれない、絶対無理！とあきらめかけもしましたが、何とか乗り切ることが出来たかなと思っています。ほっ：（こころの声）。私にとっては、修士課程でTESOL（英語教育学）を学んでいる頃から、いつかは英語科教育法を担当したいという強い気持ちの実現できたわけですから、このような問題に直面した経緯があったとしても、やはり満足感の方が大きいのは事実です。もともと大学でも

中学英語教師になりたくて教職課程を取っていました。が、教育実習は中学ではなく出身高校でしなければならず、まるで予備校のような雰囲気での味気ない授業に嫌気がさし、教職に就くことは断念したのでした。でも今でも、「英語科教育法」で学生の模擬授業準備をさせる過程での細案やワークシートの添削を行っていると、私自身とてもワクワクしてしまい、やっぱり中学英語教師になりたかったんだと今更ながら思っています。もう時すでに遅しなのですが。

退職後は隣県にて新生活がスタートします。現職中は実現できなかった様々なことにやっとチャレンジできそうで、新しい毎日に思いを馳せている自分です。ケンタンでお世話になった先生方、出会いのあった学生みなさん、本当にありがとうございました！

（文学科英語英文学専攻 助教）



着任のご挨拶

小亀 拓也



二〇二二年四月に県短に着任いたしました小亀拓也と申します。日本語日本文学専攻に所属し、主に日本語学の科目を担当しております。専門の日本語学を教える機会をいただけたことに喜びを感じると同時に、県短の日本語学関連科目を一人で担当することに大きな責任を感じております。精一杯努めてまいりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

私は生まれも育ちも大阪で、(一年間のタイ経験を除けば)人生のほとんどすべてを大阪で過ごしてまいりました。今回の着任が私にとっての「初鹿児島」ということになります。着任後しばらくの間、二年生に「どうして鹿児島に来たんですか」と聞かれることが多かったのですが、ちゃんとお答えしたことはありません

でした。この文章は主に文学科の学生が読むと聞いておりますので、せっかくですからこの場でお話ししておきたいと思っています。

遡ること五十余年前。由美子という名の女の子が徳之島で誕生しました。由美子は非常に熱心に勉学に励みますが、家庭の経済状況から大学への進学は断念、

本土に出て働くことに。由美子の父が城山観光グループの創業者の保直次氏と友人だったこともあり、由美子は城山観光ホテル(現、城山ホテル鹿児島)で働かせてもらうこととなります。保氏の厚意に報いようと毎日熱心に働く由美子。その働きぶりが認められ、社員旅行に来た団体の宴会の手配なども任せられるようになります。そんな中、ある関西からの社員旅行の幹事を務めていた男性と電話で打ち合わせを重ねるうちに意気投合し、いつしか恋仲に。その後、数年間の遠距離恋愛を経て、二人はめでたく結婚。——もうお気づきかもしれませんが、そうです、

その二人の間に生まれたのが、私です。私が今ここに存在しているのは、父と母が城山観光ホテルで出逢ってくれたから、ということになります。この話を聞いてからずっと、ルーツである鹿児島に来たくて来たくて仕方なかったわけですが、今やそこで働くことができているなんて、本当に感無量です。

以上長々と私が鹿児島に来た理由の一つを語ってきたわけですが、当然それだけではありません。私が大学時代に出会った鹿児島出身の友人も後輩も、みんな温厚で気立ての良い人ばかりで大好きでした。当然、個人単位の「個性」はあるのですが、その背景に勝手に鹿児島県の「県民性」を見て取ってしまうほどに、鹿児島県の人は私にとって憧れの対象としてあつたのです。実際に、この十ヶ月でいろいろな方と接しましたが、皆さん本当にお優しい。また素敵なのは人だけではなく、自然もきれいで、食べ物もおいしい。自分はなんて素晴らしいところ

〈学外通信〉

に赴任できたのだろうと、日々その幸せを
噛み締めています。

さて、着任して十ヶ月、ようやく県短
にも慣れてまいりました。県短の皆さん
がこれまた親切で、毎日助けていただき
ながら過ごしております。何か困ったこ
とがあっても、とりあえず文学科の先生

(特にお隣の研究室の竹本先生)に助けを
求めれば、ありがたいことに大抵のこと
が解決します。自分一人の力でどうしよ
うもないことは、すぐに誰かに相談する。
私が自らの姿勢を通して学生さんに伝え
ることのできる唯一のことかもしれません。

これからも周りの方々に助けていただき
ながら、いつかは私も周りの方をお支え
することができるように、少しずつでも
前進することができればと思います。
教員の皆様も学生の皆さんも、今後とも
どうぞよろしくお願いいたします。

(文学科日本語日本文学専攻 講師)

ベストな選択とは何か？

肥後 摩子

この原稿を書くにあたり、県短を卒業
してからも四年という歳月が経ったの
かと驚いています。県短での学生生活や
卒業後について、僭越ながら書かせてい
ただきたいと思います。

県短での二年間はあつという間でした。
入学して初めて自分で時間割を組むとき、
友人との講義を受講するか相談した
結果、高校の時間割のようにぎゅうぎゅう
になって、前期が終わる頃には、テストや
レポートを十五個近くこなしていた記憶
があります。(だいぶやり過ぎました笑)。
私の学年の日文は、女子オンリーでし
た。みんな本当に仲が良くて、食堂に
いけば日文の友人がどんどん集まってい

て、一緒にランチをしたり、課題をしたり、
講義以外の時間も楽しいことばかりでし
た。学生生活は、短い期間での単位取得
など大変なこともありましたが、それを
乗り越えられたのは、共に励まし合って
頑張れた友人に恵まれたからだと思っ
ています。

私は、自治会にも所属していません。
二年生のときは、日文で唯一の所属員と
なりましたが、他の専攻の友人を多く作
ることができました。今でも、休日に遊
んだり、話をしたりする仲の良い友人や
後輩もいます。副会長として様々な行事
に携わり、ゼロからみんなで創り上げ、
参加者の楽しかったという感想が聞けた
ときの達成感は、このときにしか味わえ
ないものだったと思います。

そして、県短卒業後は、公務員学校に
通いました。私の将来の職業候補はたく
さんあったのですが、その中のひとつに
公務員がありました。私の身近に公務員
として働いている人が多く、仕事のイメ

ージがなんとなくついていたからです。公務員は二〜三年で異動があり、仕事ガラリと変わることがあります。それが大変だという人もいますが、この仕事スタイルが私には合っているような気がしたのです。というのも、学生の時にキャラクターショーやイベントで司会やスタッフのアルバイトをしていたからです。一つとして同じ現場がなく、臨機応変に対応する力を磨き、得た経験を次の現場に活かしていくのが楽しくて、仕事内容は違うものの、仕事スタイルが似ている公務員を目指すことに決め、鹿児島県庁に就職することができました。

入庁して二年目で異動を経験し、現在の所属が二か所目になります。一か所目は農政関係で検査業務を、二か所目は所属課の庶務と県庁全体の文書の取扱を考えると、畑の全く異なる仕事をしています。

入庁後は、すぐにコロナが蔓延し、新採研修が中止になったり、同期や職場の方

との交流の機会が少なかったり、思い描いていた社会人生活よりも窮屈さを感じています。また、自分の業務とは別に、コロナ関係の応援業務（防護服を着て、療養ホテルでの作業）や鳥インフルエンザの防疫業務（実際に鶏の捕獲や運搬を経験）に携わり、想像より多岐にわたる公務員の業務にも驚かされました。

人生とはなかなか予定通り、想定通りにいかないものですが、それもまた一つの経験となり、いつか役に立つときが来ると思っています。目の前のことに一生懸命向き合い、しっかりと意思のある選択をしていけば、ふとしたときに、この道も悪くないかも、自分の運命だったのかもなんて思えてきたりします。異動で業務が大きく変わり、忙しい毎日を過ごしていますが、これからも任された仕事に真摯に向き合い、日々成長できるように努めたいと思います。

県短生であるみなさんには、自分の思う道を進んで、少しでも楽しい人生を

過ごしてほしいと願っています。私のように紆余曲折なことばかりでも、自分の選択次第では、楽しいこともいっぱいあると思います。

県短生活はあっという間に過ぎていきます。もしかしたら、他の友人より自由な時間は限られているかも知れませんが、勉強もアルバイトも、そのほかの様々なことも、後悔のないように毎日過ごしてくださいね。みなさんのこれからがより良いものになりますように、応援しています。

（二〇一九年三月 日本語日本文学専攻卒業
現在、鹿児島県職員）



アナウンサーの仕事



間世田 桜子

私の職業はアナウンサーだ。アナウンサーといっても、カメラの前でニュース

を読むだけではないため、仕事内容について説明しようと思う。私が働くKYT

鹿児島讀賣テレビでは、アナウンサーも記者として働いており、割合でいえば

アナウンサーよりも記者としての仕事のほうが多い。記者は、事件・事故が起

こった際など現地に赴き、昼や夕方の方のニュース原稿を書くことが主な仕事だ。

他にも、「警戒電話」という、事件・事故が起こっていないかを警察へ確認する電

話をかけたりもする。ニュースを読んだ直後であっても、もし何かが起こったら

現場へ真っ先に向かい、自ら取材して原稿を書いたりする。自分で書いたニュース

原稿を自ら読むほか、テロップを発注し

たり、ニュースの映像編集にも立ち会ったりと、一人が担当する仕事は幅広い。

ほかにも、独自の視点を持って自ら企画・取材してつくりあげる「特集もの」を

放送することもある。つまり、伝え手・記者・ディレクターと、こなす仕事は多

岐にわたっている。

私はもともと自分に何の仕事が合っているのか、どのような仕事をしたいのかが全く分からなかった。県短に入学して

しばらく経ったとき、キャリアデザイン

の授業の一環で卒業生の体験談を聞く機会があった。登壇された卒業生は三十代

後半の女性で、私と同じ学科を卒業後、鹿児島島のテレビ局でアナウンサーを経験

し、ディレクターとして働いている方だった。以前から漠然と憧れのあったテ

レビ業界だが、自分にはあまりにも遠い世界。どのようにして目指せばいいのか

など調べたこともなかった。しかし、その先輩の話聞くうちに「テレビ局ではどんな仕事をするのだろうか…どうすれば

働くことができるのだろうか」と次第に目をキラキラさせ、一生懸命に話を聞いた

ことは今でも鮮明に覚えている。県短卒業後は三年ほど社会人を経験したが、

次第に「テレビ業界」を目指すようになり、それを明確にかなえるために大学

編入を決意する。目標に近づくための「修行期間」だと考え選んだ道だった。

振り返ってみると、これまでの人生の中で、県短で過ごした二年間はかけがえない時間だったと思う。県短で出会った

友人との関係は今も続いている（ちなみに一か月に一回は飲みに行く約束をして

いる）。そして、個性豊かな先生方も魅力のひとつで、学生の気持ちに寄り添って

くれる方々だと思う。短大であるが故に、卒業論文の期間は特に忙しい。しかし、

卒業論文は「文献を読み解き、より良い表現を選び取りながらわかりやすく綴

る」作業の繰り返しであり、意外にもその経験は今の仕事に生きている。何か

しら「苦しい中でもがき続け、諦めず

につくり上げる経験」というのは人生の役に立つと確信している。

県短に通う一人の学生が数年後に憧れていた業界で働くことができていたのは、能力でも学力でもなく、「やってみようかな！」という少しの勇氣と、最後まで諦めない強い気持ちの成果だと思う。後輩の皆さんにお伝えしたいのは「未来は自分で切りひらくもの」であり、「何かを始めるのに遅すぎることはない」ということだ。少なくとも、諦めたらそこで終わりだと思う。あなたが現在、やりたいことが見つからないのであれば、卒業から数年経ってから目指せば良いし、もし夢や目標があるのであれば、今できるあらゆることに挑戦してがむしゃらに進めばいいと思う。皆さんがこれから進む未来を、心から応援している。

(二〇一六年三月 日本語日本文学専攻卒業
現在、鹿児島読書テレビアナウンサー)

県短での学びや 経験を生かして

協田 愛美莉

私は平成二十七年に鹿児島県立短期大学文学科英語日本文学専攻に入学しました。自分の好きな英語や異文化について専門的に学べることに胸を膨らませていたことを今でも覚えています。

入学直後から、英作文や英会話、英文学の授業など、専門的な授業が沢山ありました。英作文や英会話はネイティブの先生による授業のため、最初はついていくのが必死でしたが、先生方が学生一人一人の習熟度に合わせてご指導くださったので、少しずつ成長することを実感できました。また、「TOEICで八〇〇点取りたい!」「海外に留学したい!」「英語を使ってこんなお仕事につきたい!」など、みんながそれぞれ高い目標を持っている

のも英語日本文学専攻の特徴でした。

このようなモチベーションの高い環境のおかげで私も勉学に励むことができたと思います。先生方との距離が近いことや、授業が少人数制であることも魅力的でした。最適な学習環境が整っていたと思います。私は、教職も履修し、ゼミでも英語教育について研究しました。さらに教育についてもっと深く学びたいという気持ちになり、教育学部への編入を志しました。働きながら学びたいという気持ちが大きく、大阪教育大学第二部(夜間学部)へ編入することになりました。

大阪教育大では、より深く教育について学ぶことができました。教育実習やインターン、模擬授業が多い講義など教員になるための環境が整っています。算数や音楽など初等教育に必要な教科やその教育法などが主な授業で、そのほかにも学級経営や生徒指導・教育心理学について学び、小学校教員になるために必要な知識や経験を得ることができました。

また、昼間働いて夜六時から九時まで授業を受けるといふ生活スタイルは毎日がとても充実し楽しかったです。私は昼間はインターナショナルスクール保育園のアシスタントとして働いていました。

主な仕事はネイティブの先生のレッスンを補助に入ったり、小さな子供たち（一二歳児）のオムツを変えたりなどの生活補助や、保護者対応などがありました。

幼児英語教育や保育について働きながら学ぶことができ、ネイティブの先生とはもちろん英語で会話をするので英会話力もそこで磨くことができました。大学や昼間のアルバイト経験を通して教育を学ぶ中で、もちろん先生になりたいという気持ちもありましたが、同時にもっと多くの方々と広く関わる仕事もしてみたい気持ちが出てきました。保育園で先生として実際に働いてみて、もっと色々な国や年代の方と関わり自分の幅を広げたいと思ったからです。そこで就職活動では、様々な国籍や年代の方と多く関わる

ことのできる会社を軸に就活をし、エアラインやメーカーや商社などを受験しました。

ご縁がありピーチ・アビエーションに客室乗務員として入社することになりました。現在社会人二年目になり、充実した日々を送っています。主な仕事内容は機内の安全を守る【保安業務】とお客様に快適に空の旅を楽しんでいただく【機内サービス業務】があります。お客様を安全に到着地まで送り届けられることや、クルー（乗務員）とチームワークを発揮しフライトを充実させることにやりがいや達成感を感じています。また、外国籍のお客様やパイロットの方々とコミュニケーションをとる際は英語を使います。県短で培った英会話力やコミュニケーション能力を生かすことができ嬉しく感じます。

県短での学びや経験があったからこそ、編入後や就職で新しいことに挑戦することができました。本当にありがとうございます

いました。みなさんも、県短で充実した二年間を過ごして、将来の夢を見つけてください。在学生の皆さんやこれから県短に入学する後輩のみなさんの役に立てるように、私自身も精進して参りたいと思います。そしてこれからも県短とのご縁を大切にしていきたいと思えます。

（二〇一七年三月 英語英文学専攻卒業
現在、ピーチ・アビエーション株式会社
客室部客室乗務員）



県短での学問との出会い

今井 凜

私は、県短を一年前に卒業しました。大隅半島の志布志市出身です。

私と県短の出会いには、学費が安いと聞いて参加した高校三年生の時のオープンキャンパス。この時、英語コミュニケーションの体験授業を受けました。

その授業で突然、参加者全員の前で私は、「What's your first name?」と質問されました。今となつてはとても簡単な質問なのですが、初めての英語だけの授業に少し緊張していた私は、ファーストネームは「イマイ」だったか「リン」だったか、一瞬わからなくなったのを今でも覚えています。でも同時にその時、県短の英文で英語を勉強したいと思ったのもこの瞬間でした。

出会った先生のゼミに入り、英文の先輩方の留学ワークショップを体験したり、玉江小の児童のみなさんのための英語ワークショップを行ったり、英語でのゼミ合宿をしたり、様々な英語に関わる活動に取り組みました。

そんな私は一年生の秋頃に一大決心をします。ニュージーランドに留学するために県短を一年間休学しました。

留学先では、「TECSOL（テクソル英語以外の言語を話すことのための英語教授法）の勉強をして英語を教える資格を取りました。そのコースの中で、教育は「eliciting（エリシティング 引き出すこと）」と表現され、「We are not teaching but educating（教えているのではなく教育しているのです）」という先生のコメントに衝撃を受けました。それと同時に、高校までに私が受けてきた教育の何が問題であったのかを考えるようになりました。

留学から帰国後は、鹿児島で就職するつもりで、就活用の写真を撮ったりして

準備を進めていました。しかし、様々なありがたいご縁が重なり、現在、大学で「教育とは何か」について学んでいます。

実は、留学先で教育に興味をもった私は、帰国後、人生で一番と言ってもいいくらい勉強に励みました。また、偶然、専門が教育学であるゼミの先生の研究室には、たくさんの教育学の本がありました。この中から本を紹介していただければ読み、疑問に思ったことは先生や先輩方、英文の同級生たちと議論したり、理解したことを付箋やホワイトボードに書き出して整理しました。受験直前には、先生の研究室の壁は一面、私の付箋でいっぱいになりました。本当にたくさんの本を読んだと思います。

このように、自分の学びたいこと、何か新しいことを知ること、世界が広がる面白さを知った県短での二年間は私にとってとても有意義なものでした。もし県短に入学していなかったら、今のようには私は何かを学び続けていたでしょうか。

想像できません。そのくらい県短では大きな成長をすることができたと実感しています。そして、何より、県短にはとても親身に私たちと一緒に悩みや進路を考えてくださる先生がいらっしやいます。先生たちとの距離がいい意味で近いことは世界でトップレベルだと思います。

現在通っている上智大学での学びは、全て私にとって挑戦です。初めは学校の雰囲気も分からなく、教室にたどり着くのもやっとでした。また、私は県短で教職課程を履修しておらず、教育学は独学で編入したので、教育学について基礎から応用までを同時並行で勉強しなければなりません。内容が複雑で難しいと頭を悩ませることもありますが、友人たちと協力しながら、新しい知見に触れられる充実した毎日を通していきます。

その一方で、私が編入して最も辛かったことは、インプットした情報を活用してアウトプットすることです。授業で先生が言われたことを鵜呑みにするのでは

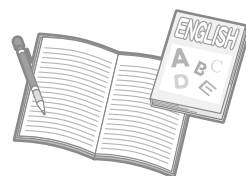
なく、今までの経験やディスカッションなどをもとに、自分の考えを言語化することが非常に難しいと感じています。最近、少しずつ自分の考えを整理し、伝えることができるようになってきたと感じるようになりましたが、より正確に、質のあるアウトプットを目指したいと思います。

最後に、今、県短で学んでいる皆さんへ。これから県短で学ぼうとしている皆さんへ。将来やりたいことは何ですか。夢中になって取り組んでみたいことは何ですか。県短での生活や授業を通して、ぜひ見つけてください。やってみたいことが曖昧でもいいと思います。少し時間があるときに、自分について考えてみてください。自分のやりたいこと、学びたいことを見つけることが次のステップにつながります。興味関心を見つけてきっかけ作りを是非県短で試してみてください。私も、本当に自分のしたいことは何なのか、ゆっくり時間をかけて考えてみたい

と思います。私の経験が少しでも皆さんの将来の役に立てたら幸いです。

(二〇二二年三月 英語英文学専攻卒業)

現在、上智大学総合人間科学部教育学科
三年在学中)



〈卒業にあたって〉

充実した二年間

文学科日本語日本文学専攻

堀口 美紬

今、県短での二年間を振り返ると、充実した日々が送れたように感じる。毎日多くの授業を受け、先生方と他愛もない会話をしたり、友人と笑い合ったりと、とても濃く、楽しい学生生活だった。

この二年間の中で特に思い出に残っているものは二つある。一つ目はゼミ活動だ。私は日本近現代文学のゼミに所属していたが、この分野に興味のある学生が十数名集まり、その時代の文豪や作品などから一つテーマを決め、それについて全員で意見を出し合う、という活動が私はとても好きだった。高校までの学校生活でも、授業の中で四、五人のグループ活動をすることはあったが、その倍以上の人数が集まると、より多くの意見が出ておもしろかった。何より、近現代文学が好きならばかりが集まっているため、話し合いの内容が深く、毎回新たな視点が得られて刺激的だった。話し合いがいつも楽しかったり、同じ学問分野に対して知的好奇心を持つ学生が集まることで、これほど議論が盛り上がるのだ、という発見があったりして、ゼミの授業は毎週楽しみだった。私はゼミの活動がとても好きだったし、このゼミに入ることができて本当に良かったと思う。

二つ目は、友人との何気ない日常会話である。県短では、高校時代の友人とは違う考えやバックグラウンドを持つ友人に出会い、彼女らと毎日顔を合わせて他愛もない話をするのがとても楽しかった。同年代であっても、自分とは異なる感性を持つていたり、自分とは違う他のものに興味があったりして、色々な話ができたと今となつては、学生生活が充実した大きな理由はそこにあつたように思う。県短でしか出会えない仲間に出会えたことも、県短に入学して良かったと心から思えることの一つである。

このようにして二年間充実した日々を過ごしてきたわけだが、この春、私は県短を卒業し、中学校教員として就職する。憧れの職業に就ける喜びはあるものの、不安も少なからずある。三月まで学生だった自分に、教育実習しか経験のない自分に、教員の職が務まるのか、子どもたちに正しいことを教え、立派な教員として振る舞うことができるのか、不安や

心配は尽きない。しかし、私は県短での二年間で様々なことを学んできた。教職課程を通じては、教育の定義や歴史、生徒指導の役割とその具体的方法、国語の授業の目的や進め方などを学び、専門分野である日本語や日本文学の授業でも、国語についてこれまでとは違った見方で、多様な角度から考え直すなど、県短の先生方から多くのことをご教授いただき、教育についても国語についても、深く学ぶことができた。また、自分自身でも教育関係や文学の本を積極的に読み、なるべく早く教員としての実践力を身につけられるよう努めてきた。これらの経験の中で、自分はどうのような教員になりたいのか、国語科の教員として、子どもたちにどのような力を身につけさせたいのか、自分なりに模索してきた。まだ完全な答えは出せていないが、現段階では、生徒や教職員から信頼され、親切に、かつ丁寧に仕事をこなせる教員になることが目標であり、生徒には情報を正しく

読み取る力を身につかせ、言葉や表現を大事にできるように指導していきたいというのが今の自分に出せる答えである。

また、教科以外にも学校における指導全体を通して、どんなに時代が変わっても自分自身を財産とし、どんな困難も乗り越えていけるような子どもを育てていきたい。そして、県短の卒業生として、胸を張って教員として働ける自分になることが今の私の目標である。

これから就職するにあたり、きっと大きな困難に直面することもあるだろうが、それを乗り越え、立派な社会人となれるよう、県短での学びや思い出を糧として精一杯力を尽くしていきたい。



二年間を振り返って

文学科日本語日本文学専攻

牟禮 和

コロナ禍の大学受験、加えて、センター試験から共通テストへの変更と、大変だった受験期。真新しいスーツに袖を通し、期待や希望に満ち溢れ、出席した入学式がつい最近のことのように感じます。振り返れば、本当にあつと言期間の二年間でした。

私は、第一志望の大学に落ちた末に、県短へ入学しました。県短への入学が決まったときから、三年次編入と自分の夢を見つけていることを目標にしてきました。そこで、短大生活は何か新しいことに挑戦をし、できるだけ多くの授業を受講しようと考えました。挑戦の一步として教職を受講し、授業を多く取りました。一年生のころは大体フルコマで、本当に

大学生なのかと疑いたくなるような生活だったと思います。アルバイトや、書道サークル、さらに、夏休みにはインターンシップに挑戦しました。高校時代は理系として過ごし、「国語はどちらか」という程度でしたが、「好きな教科だ」という程度でしたが、大学に入って文学を学ぶと、様々な視点で考える機会ができ、視野が広がり、文学が楽しいと思うようになってきました。後期からは、ゼミ活動が始まりました。希望していた現代文学のゼミに所属でき、友人や先生の考えを聞きながら、文学を通して、自分自身の考えを深めることができたと思います。二年生になると、教育実習や進路決定、さらには卒業研究があり、忙しい生活だったと感じています。教育実習では母校の伊敷中学校へ行き、実際の教育現場、さらに社会で働くことの大変さを改めて知れました。進路では、周りが就活を終えていく中で、編入試験に向けて小論文や面接対策をし、最後まで諦めませんでした。卒業研究では

大好きなジブリ映画についての研究をすることができました。ぎりぎりまで、軸がぶれ、提出するのが大変だったため、もっと早くに取り掛かれば良かったと後悔したのも良い思い出です。

忙しい二年間で、時には授業に出たくないと思ったこともありましたが、こんなにも毎日楽しく、充実した日々を過ごせたのは、自分が頑張ったからではありません。県短で出会った先生方や友人、ずっと応援してくれる家族や大学以前の友人が居たからです。大学入試まで共に勉強をした仲間の存在。昼ごはんを共にしたり、休み時間に大爆笑をしたり、休暇に福岡旅行へ行ったり、試験前にも勉強をしたり、進路について相談し合ったり、文化祭に一生懸命になったり、卒アルを作成したりした県短で出会った友人。県短のことや大学生活についてアドバイスをくださった先輩方。授業で専門知識を教えてくださいましたり、進路指導をしてくださったりした県短の先生方。

何をするにも応援してくれる家族。多くの方々に支えられ、多くの思い出を作ることができ、無事、卒業を迎えることができています。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、この四月から鹿児島大学法文学部人文学科へ編入をします。文学をより学び、文化や映像についてもっと勉強したいと考えていますが、将来の夢が決まっていません。短大入学時に立てた目標の一つである「自分の夢を見つける」ことがまだ、達成できていません。しかし、短大生活の中で多くの経験をし、自己分析ができ、自分が興味のある分野を見つけることができました。編入後には目標を完全達成できるよう、県短での思い出を胸に、日々感謝を忘れず、頑張りたいと思います。

最後に、この二年間を過ごすにあたり、支えてくださった多くの方々に感謝をしたいと思います。県短で過ごした日々は私の財産です。本当にありがとうございました。

自分自身と

向き合った二年間

文学科英語英文学専攻

田中 南妃

つい最近大学生になったような気がしていましたが、あっという間に卒業の時期を迎えてしまいました。大学生活を振り返ってみると、二年間という短い期間でしたが色濃い学生生活を送ることができていたと思います。入学したばかりの頃は慣れない課題やレポートに悪戦苦闘しながら忙しい毎日を過ごしていました。しかし私のそばにはいつも支えてくれる友人たちがいました。課題について意見を交わしたり、一緒に悩んだりしてくれた友人の存在は私の中でとても大きなものとなりました。コロナウイルスの影響で一部対面での授業が難しくなった時期もありました。毎日友人や先生方と会える

ことは当たり前ではないと改めて感じ、毎日を大切に過ごそうと思うようになりました。コロナウイルスの影響下でも学生のことを考え、対面と遠隔の二通りの授業をしてくれた県短にはとても感謝しています。

英文にきて、自分と似ているようで違う考えを持つ友人たちからさまざまなことを学びました。英文にいるとよくカルチャーショックということばを耳にします。私はカルチャーショックとは違う国の文化に触れた時に感じるものだと思います。しかしそれだけではないことに気づきました。私たちは授業を通して初めて知ったことや、友人から初めて聞いて驚いたことなど身近な場所や人からもカルチャーショックを受けているのです。このことに気がついたとき、自分の視野が広がったような気がしました。自分の視野を広げたいとき、私はいつも自分から遠いものについて知ろうとしていました。しかしこの経験を通して

身近にあるものを知ろうとすることも必要であると学びました。その結果、まずは自分のことをよく知ろうと思ひ、私はどんな人間なのか改めて自分自身について考えるようになりました。自分自身を理解することは大切ですがとても難しいです。特に就職活動の際には自分の軸を持つことが大切であるということを感じると同時に、自己分析だけで自分を

知ろうとすることへの限界を感じました。自分のことは自分が一番わかっていると

思っていたけれど、人から言われて初めて気づくこともありました。就職活動では自己分析も大切ですが、ぜひ他己分析を試みてください。自分の新たな可能性に気づくことができるかもしれません。

大学生活で最も力を入れたのは卒業論文でした。今まで書いたことのない量の文章を書くことになり、何から始めてよいか分かりませんでした。大学生活で学んだことや、その中で自分が一番興味を持ったことを振り返りながら少

ずつ書き進めていきました。納得がいくまで何度も書き直したり、参考文献を見つけるのに苦労したりすることもありました。周囲の協力もあり納得のいく卒業論文を完成させることができ、今までに感じたことのない達成感を得ることができました。この卒業論文は私の二年間の大学生活の集大成です。

四月からは社会人としての生活が始まります。新しい土地で働くことに不安を感じることもあります。大学で学んできたことや優しい友人たち、ご指導くださった先生方の存在を胸に自分らしく頑張っていこうと思います。あつという間でしたが本当に楽しく学びのある二年間でした。これからも学び続ける姿勢を忘れずに、さまざまなことに挑戦していきたいと思ひます。私を支えてくださった皆さん、本当にありがとうございます。



確実に成長できた二年間

文学科英語英文学専攻

竹内 夢

私にとって二年間の県短での生活は、本当にあつという間で一瞬で過ぎ去ったような気がします。それは毎日忙しくもあり楽しくもありとても充実していたからだと思います。今思い返すと、入学当初は新しい環境に対する不安よりも、大好きな英語を毎日学べるのが嬉しくて、授業のある前日はまるで遠足の前の日のようにわくわくしながら学校の準備をしていたのを覚えています。ほとんどの授業が少人数であったため、質問や発言がしやすく、高校のときの授業とは違い、例えば、英語だけで行うコミュニケーションシジョン概念やオーラルコミュニケーションなどのように、学生自身が主体的に英語を使って学ぶ授業も多くあったのでとても

新鮮でした。

実は、私は比較的早い段階で県短への入学を決めていました。もしかすると同期で一番早かったかもしれません。小学生のころから通っていた英会話教室にいらっしやつた県短英文の先輩方の影響で、協定を結んでいるアメリカのウイスコンシン州立大学リバーフォールズ校(UWRP)への編入を希望していたからです。県短で二年間しっかり学んだ後に、アメリカの大学の三年生に編入できるというチャンスは、いつかアメリカの大学で学んでみたいと思っていた高校生の私にとって、まさに最高の選択肢でした。

県短に入学後最初の一年間は、UWRPへの編入条件であるTOEICで七五〇点以上を取得することを頑張りました。入学してすぐに、先生やTOEICで高得点を取得した先輩方にTOEICの勉強方法を教えていただき、それをひたすら実行し、授業やバイト、習い事などでどんなに疲れている時でも毎日欠かさず勉強しま

した。最初はなかなか点数が上がらず、目標の点数を取れるかどうか不安でいっぱいになることもありました。一生懸命勉強しているのにも関わらず、点数が下がってしまったときには特に落ち込みました。でもアメリカの大学に編入留学するという目標を見失わず、同じ目標をもつ親友と励まし合いながら諦めずに勉強し続けたことで、一年生の後期が終わる頃には目標点数を超えることができました。目標点数をようやく超えることができたときには編入留学の実現が一步近づいたことを実感して本当に嬉しかったのを今でも覚えています。

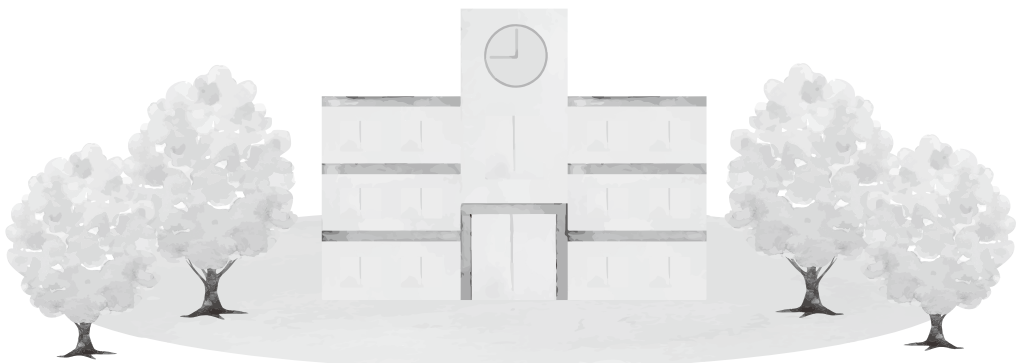
二年生になると卒業研究が本格的に始まりました。私が所属したゼミでは、異文化コミュニケーションを主に学習していました。なかでも、春休みから読み始めていたエリン・メイヤーのベストセラー『The Culture Map』を読んでさらに興味が高まったハイコンテクスト文化とローコンテクスト文化をとりあげ、

対人コミュニケーションとコンテクスト文化の関係について研究しました。自分で研究をして英語で論文を執筆するという経験は人生で初めてだったので、自分の言葉で論文をまとめることは予想以上に難しく、無事完成することができたか心配でした。なかでも一番苦労したのはアンケートの作成とその集計でした。

もちろん自分でアンケートを作ることにも初めてだったので、項目の意味を分かりやすく伝えるにはどのような表現を使うのがいいか、アンケート結果を効率よく集計するにはどうしたらいいのかなどたくさん悩みました。うまくいかないときには先生がいつもの確なアドバイスをしてくださったり、相談に乗ってくださったりして手厚くサポートしてくださいました。やっと卒業論文を完成することができ、ゼミ生メンバーと一緒に正門の前で論文を持って記念撮影をしてから教務課に提出したときの喜びと達成感は忘れられません。卒業研究は本当に大変でした

が、深く考えた内容を表現する作業を通して自分を大きく成長させることができ、自信をつけることができました。

二年間という短い学生生活を通じて、大好きな英語を日々学ぶことができただけでなく、尊敬する恩師や共に高め合える素敵な友達に出会うことができました。本当に感謝しています。楽しく充実していた短大生活が終わってしまうことは少し寂しいですが、今年の九月から始まるアメリカでの大学生活でも県短での出会いと経験を大切に、学んだことを活かしてもっと成長できるように頑張っていきたいです。



彙報

○鹿児島県立短期大学人文学会会則

員

◎人文学会行事日程

二〇二二年

三月十八日 「会報」第84号発行

四月十六日 総会・役員交代

(庶務) 楊

二〇二三年

三月一八日 「会報」第85号発行

四月十五日 総会・役員交代

(会長≡文学科長) 遠峯

(庶務) 石井



(一九七七年六月三日制定)

(二〇二〇年四月十七日最終改正)

第一章 総則

第一条 本会は鹿児島県立短期大学人文学会と称する。

第二条 本会の事務所を鹿児島県立短期大学文学科日文資料室におく。

第三条 本会は人文諸科学の発展に寄与し、会員の研究振興を図ることを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1 研究調査・資料の収集

2 『人文学会報』の発行(年一回)

3 研究会・講演会等の開催

4 その他役員会が適当と認めた事業

第二章 会員

第五条 本会は次の会員をもって組織する。

1 普通会員 鹿児島県立短期大学に

所属し、人文諸科学に関心をもつ教

2 学生会員 鹿児島県立短期大学に

所属し、人文諸科学に関心をもつ文

学科在学生

3 特別会員 本会の発展に貢献し、役員会において認められたもの

4 賛助会員 本会の趣旨に賛同し、普通会員と同額以上の会費を納入するもの

第六条 会員として入会しようとする者は、入会申込書を会長に提出し、役員会の承認を得るものとする。

第七条 会員は、総会において別に定める会費を納入しなければならない。

第八条 会員は、退会届を会長に提出し任意に退会することができる。

2 会員が、次の各号のいずれかに該当するときは、退会したものみなす。

(1) 本人が死亡したとき。

(2) 学生会員が卒業したとき。

第九条 本会は普通会員による総会を年度

始めに開催する。ただし、必要のある時は臨時的に総会を開催することができる。

第三章 役員

第十条 本会に次の役員をおく。役員任期は一年とする。

会長 一名

庶務 一名

会計監査 一名

第十一条 本会は定期的に役員会を開催する。ただし、必要のある時は臨時的に役員会を開催することができる。

第四章 会計

第十二条 本会の経費は、事業収入・寄付金および助成金をこれにあてる。

第十三条 会費は役員会での審議を経て、総会の決議により別に定める。

第十四条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第五章 会則改正

第十五条 本会則の改正は役員会での審議を経て、総会の決議によって行う。

附則

1. この会則は、二〇二〇年四月十七日より実施する。

○会費に関する総会決議

(二〇一五年十一月二十日)

(二〇二〇年四月十七日最終改正)

本会の会費を次のとおり定める。

普通会员 一年二〇〇〇円

学生会員 二年一〇〇〇円

《編集後記》

大雑把な性格のため、細かいお仕事がそれはそれは苦手なもので(笑)、「ああ、原稿の編集やらなきゃ」と思いながら、ついつい後回しにしてしまいました。編集作業をしながら寄稿された原稿を読んで、まだ誰も読んでいない原稿を最初に読むことができる喜びを一人で楽しませていただきました。ご寄稿いただいた先生方、卒業生、学生のみなさん、おひとりおひとりの個性あふれるストーリーをご寄稿くださり、心から感謝申し上げます。また、昨年度庶務の楊先生には色々とサポートしていただき、会報発行まであと少し。苦手な細かい作業を終えることができそうです。ありがとうございました。

『人文学会報』は文学科ホームページ(<http://www.k-kentan.ac.jp/lit/>)に掲載する予定です。『人文』論集の方は、鹿児島立短期大学リポジトリ

(<https://k-kentan.repo.nii.ac.jp/>)で公開しています。(石井英里子)



〈令和4年度卒業研究標題〉

文学科日本語日本文学専攻

氏名

卒業研究標題

《土肥ゼミ …… 中国文学》

今堀由華子	『三国志演義』における諸葛亮の描かれ方について 一作中の感情表現から一
入徳舞衣	『水滸伝』における女傑の好漢像
鶴福楽	『搜神記』における龍と蛇の受容
鶴田瑞穂	杜甫の詩に登場する「鳥」の表現についての研究
中野寧々	白居易 閑適の思想 一私生活からみえるもの一
本田祐子	『西遊記』と『大唐三蔵取経詩話』の比較から見る西遊記物語
持留帆乃佳	『紅楼夢』の作中における花の意義について

《楊ゼミ …… 日本語学・日本語教育学》

淡路乃愛	漫画作品と「お嬢様言葉」
小田原千裕	若年層における「大丈夫」の使用について 一許可を求める・断る場面に着目して一
喜久野乃華	Twitterでの「ちくちく言葉」の分析
中島愛莉	LINEにおける終助詞「ね」「よね」の使用の分析 一男女間での会話スタイルの違い一
吐師ちより	昭和30年代と現代の共通語・方言の使用について 一丸小丸小学校に焦点を当てて一
福元塔子	形容詞型活用助動詞の活用語尾の脱落の分析
山下蓮	ネット上での年代差、性別による感情表現の差異
吉國蒼司	現代とインターネット普及前のヒット曲の歌詞の比較 一歌詞の語彙に注目して一
リチャン・ネサン	日本語のカバー率は本当に低いのか？

《竹本ゼミ …… 日本文学・近代》

石原萌未	辻村深月『盲目的な恋と友情』における二視点で描かれる人物像と、構成が与える考察の幅
岩下茜	『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』におけるファンタジーの表現について
小脇寧音	『まぶた』を読んだときの感情の由来について
坂元優花	『水を縫う』の作中に登場する水のイメージと役割
竹山綾乃	『キノの旅』における寓話的な物語の効果について
野上夏鈴	手紙を軸に考える『斜陽』の魅力について
福留有貴子	『蟹工船』はなぜ読まれるか。
別府舞姫乃	『推し、燃ゆ』についての研究
堀夏綺	江戸川乱歩作品の錯覚の利用について
堀口美紬	国語教育における文学学習の意義と教育的役割について
牟禮和	ジブリ映画『耳をすませば』を原作と比較する

《木戸ゼミ …… 日本文学・古典》

秋山あゆな	『古今和歌集』巻第十一恋の歌からみる小野小町の恋愛観について
内山智絵	『うつほ物語』「藤原の君」巻に見る仲介者の役割
木之下梨菜	『とりかへばや物語』における女君と男君の性自認は何だったのか
桑幡愛理	『竹取物語』とジブリ映画『かぐや姫の物語』は同一の作品と言えるのか
迫田穂香	玉藻の前を切り口に考察したこと
中尾虹美	日本の人魚像 一江戸時代前期までの日本の人魚像はどこからきたのか一
中村龍人	平将門の伝説は人々にどのように受け入れられていたのだろうか 一「冥界消息」・『俵藤太物語』から見える姿一
面元りな	平安時代の和歌の中で「ゆみ」はどのように使われていたのか
美坂心音	『源氏物語』から読む恋愛観 一末摘花と光源氏の恋からの考察一

〈令和4年度卒業研究標題〉

文学科英語英文学専攻

氏名

卒業研究標題

《英米文学演習》（指導教員：轟 義昭）

平野 由佳 小説『余命10年』とそのアダプテーション映画の比較研究

《英米文学演習》（指導教員：ガルシア・アロヨ ホルヘ）

小川内 七海 Women's Independence in Society Thinking from the Point of View of Disney Princesses
小 濱 祐花 Comparison of the Culture of the Four Regions of the U.S and the Japanese Culture
仮 屋 遥 Differences and Changes of Perceptions of Animation in the U.S and Japan
川 崎 茄恋 What Disney Wanted to Tell Us Through the End of *Descendants*
北渡瀬 琳 Differences Between American and Japanese Love Songs
濱 島 菜花 Comparing Japanese and American Advertisements: Differences in People's Values in Both Countries
前 村 玲李 Changes in American Families
山之内 文乃 Princesses in America

《比較文化演習》（指導教員：小林 朋子）

牛 野 史 織 結婚観の変遷で見るフェミニズムの歴史 一本当の自立とは何か—
小 蘭 玖瑠実 マクルーハンとクラッパーのメディア論で考える地域活性化
猿 樂 莉 奈 歌舞伎と宝塚歌劇団における異性装について
下 村 遥 佳 エドガー・アラン・ポーと江戸川乱歩の作風の違い
田 中 南 妃 「宇宙船地球号」の乗組員は誰なのか
—カウンター・カルチャーを通して大量消費社会を考える—
田 中 佑 果 文学の営為 —文学を継ぐ者たちから学ぶその意義とクリエイティブ・ライティング—
土 川 海 音 歴史を辿り、世界を創る —大西洋奴隷貿易から22世紀まで—
濱 崎 愛 華 日本を家族に優しい社会に —子育て先進国フランスと比較して—
森 田 早 紀 コミック文化から読み解く異性装

《英語学演習》（指導教員：遠峯 伸一郎）

石牟禮 一 花 英語のことわざからみる文化や生活
中 馬 深 愛 映画『君の名は』における主観的把握と客観的把握
中 村 乃 愛 デイズニー作品からみる閉鎖音の脱落
前 田 未 翔 感情表現における色彩メタファーの日英比較
山 中 文 音 英語前置詞学習における認知言語学の利用とその教授法 —“in”, “on” を例に挙げて—

《英語学演習》（指導教員：石井 英里子）

竹 内 夢 High/Low Context Communication Patterns among Japanese College Students
原 口 凜々子 The Relationship between Unfriendliness and Self-Esteem among Junior College Students
松 山 愛 実 Incorporating Drama Methods into English Education in Japan
山 元 風 鈴 Extensive Reading Activities in Japanese EFL Classrooms